

呪術的視点による建築塗装の再考 — 建築塗装行為に内在する虚偽性の一考察 —

会員種別 田邊 詞庶*

塗装	クロード・レヴィ＝ストロース	呪術
仮面	ハンナ・アーレント	バートランド・ラッセル

1. はじめに

建築家が建築塗装価値について述べる時、非常に神経質となるにも関わらず、不可解な科学的判断基準（色彩論や機能性などの要因）しかもたない現状を打開する必要があると考えた。

よって、本研究の目的は、文化人類学者クロード・レヴィ＝ストロース（1908-）が「具体の科学」（『野生の思考』）で述べている、科学的／呪術的認識法を援用して、建築塗装の概念を見ていく。そして、科学と呪術の二項対立として論じるのではなく、建築塗装の呪術的概念における「虚偽性」について、新たな解釈を提示することである。

研究方法は、まず建築塗装における「虚偽」を科学的視点で取り出す作業を行った後に、呪術的概念を塗装行為の中から発見し、建築塗装に置き換えて分析する。

◆ 科学

実証性が高く、定量的な測定が可能であるもの

◆ 呪術

超自然的存在や神秘的な力に働きかけて種々の目的を達成しようとする意図的な行為。実証性も理論的にも科学には劣るが「呪術は科学の隠喩的表現とも言うべきもの」。ⁱ

2. 建築塗装における虚偽装飾論

建築塗装の虚偽性については、これまで多くの建築家によって語られてきた事である。そこで、「虚偽」を科学的視点で取り出す作業を、日本で大正年間（1912～1926）に『建築雑誌』を通して行われた「虚偽建築論争」ⁱⁱから、さらに、建築家アドルフ・ロース（1870-1933）と芸術家フリーデンスライヒ・フンデルトヴァッサー（1928-2000）の虚偽意識を対比させることで、行なった。ⁱⁱⁱ

しかし、科学的認識による視点で建築塗装の虚偽性を考えると、素材に対する真偽問題へ収束してしまうことを確認した。

3. 塗装行為の呪術的視点による分析と考察

呪術的思考から始まる建築塗装行為について分析するには、より具体的に考察するために、建築分野に囚われず多面的に行う必要があった。

3-1. 土着的建築物における呪術性

まず、建築家の手によらない土着的建築物^{iv}における呪術的な性質を備えた建築塗装には、アイデンティティの象徴としての建築塗装・信仰や儀式と関連したものがある。それらは、世界中のあらゆる共同体における意味と目的、構造を見いだすために、自分たちの周囲の自然環境と宇宙観を体系づけて説明しようとしている。



図1 家の前の領有権を表す塗装

出典『世界の住文化図鑑』p194

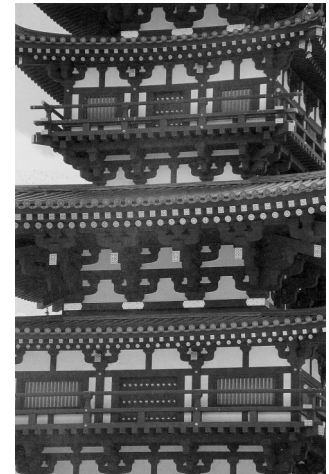


図2 奈良の薬師寺西塔

出典『色彩建築 モダニズムとフォークロア』p67

3-2. 原始社会における呪術的塗装行為の目的

呪術的塗装行為は、「仮面文化」といえる。なぜなら、儀式で施される装飾は、仮説的な意味を与える手段と言えるからだ^v。仮面の役割は、象徴から意味へ、呪術から日常へ、超自然のものから社会的なものへという移行をはっきり示す諸々の中間形態を表わすことである。

3-3. 呪術的塗装行為における虚偽性

仮面の役割をもった塗装行為は、「美は善である」と

いった観念と別次元にある。そこには、秩序を根底に抱えた「虚偽」が、重要な役割として存在する。

科学的虚偽は卑しい存在だったが、呪術的視点から虚偽を見れば、象徴性や意志が感じ取れることを指摘した。

◆マオリ族の刺青は、痛みと共に、**精神に、その一族の伝統と哲学のすべてを刻みつけるためのもの**^{vi}である。それは、現実では適わぬ夢を、虚偽の世界に投影し、それが現実へのメッセージとして反映させることで、「美そのものよりも美しく」を目指していたと言える。

◆没個性化の状況下では、人々（すべてではない）は通常行なわないようなことをする。この状態を引き起こすために、仮面や制服を利用する。または、兵士が出陣のために化粧や仮面、衣装を身に付けてきた理由として、ある能力を助長させるための幻覚剤、興奮剤、抑制剤としての効果を、無意識の内に求めていたとも考えられる。

以上より、塗装には、架空の世界である「虚偽」が現実世界に反映されるように施す呪文の機能があることを確認した。つまり、呪術的效果のある塗装は、「虚偽」を前提としていると指摘した。

4. 呪術的視点による建築塗装行為の「虚偽性」

科学的視点による建築塗装行為の価値判断は、「虚偽」を摘発することにより行なう。しかし、正直さの追求は、「意図的な正直＝虚偽」という新たな「虚偽」を生み出すサイクルを形成してしまう。

一方で、呪術的視点から価値判断すると、「正直さ」よりも、「意志の強さ」が基準になる。そこで、二つの虚偽塗装のタイプがあると予測できる。

■**現実受容型虚偽** {現実社会を軸として誇示（現実の巨大化）と隠蔽（現実の縮小化）を計った「虚偽」}

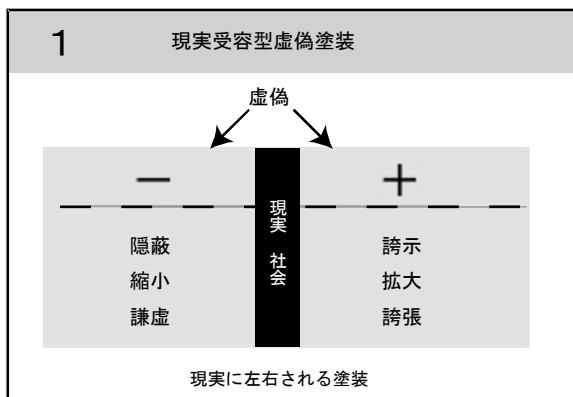


図3 呪術的視点による建築塗装行為の虚偽の所在 1

■**現実変革型虚偽** {現実に対して積極的に変化を要求する「虚偽」}

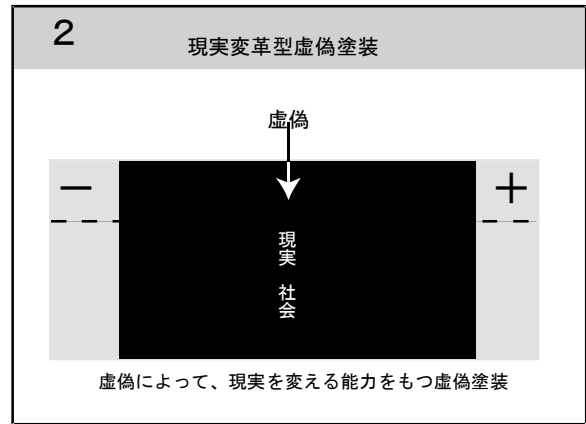


図4 呪術的視点による建築塗装行為の虚偽の所在 2

5. 良質な「虚偽」の発見

呪術的視点の問題点は、良質な「虚偽」を如何にして発見するかだ。そこで、「虚偽」の性質を明らかにするために、哲学者ハンナ・アーレント（1906-1975）が著作『全体主義の起源』『人間の条件』等で「虚偽」の政治的性格について洞察している。

そこで、**政治的領域から「虚偽」を追放するという不毛で危険な企てではなく、事実を変革する政治的「虚偽」を可能とするために「事実に真理」を要請する**^{vii}必要性を述べている。

つまり、「意志」こそが世界を変革する力であること、それゆえ「虚偽」が政治の限界であるとともにその条件であることを強調している^{viii}。

また、哲学者バートランド・ラッセル（1872-1970）は、「**科学の本性は仮説的だ**」^{ix}と述べ、科学さえも真理への仮説であり、「虚偽」を前提としている。

6. 結論

「科学的塗装行為」は、素材の保護と美観の付与と、素材に対する偽装の摘発によって、塗装価値を見出す。「呪術的塗装行為」は、現実社会と塗装行為を比較することで、真理の価値を見出し、評価する。

i クロード＝レヴィ・ストロース『野生の思考』大橋保夫訳、みすず書房、1976年

ii 中村達太郎、山崎静太郎、後藤慶二らによって行なわれた。

iii 彼らは表面的には対立した意見を持っているが、「虚偽」を最も憎むという根本において共通し、素材に対する「虚偽」をなくすために、素材利用の真偽を一つの指標としていることを指摘した。

iv (一般人の住居およびその他の建物で、通常、その所有者あるいは共同体の人々が、環境の背景や利用可能な資源を考慮しつつ、伝統的な技術を用いて建てたもの。)

v クロード＝レヴィ・ストロース『構造人類学』p286

vi 前掲『構造人類学』p281

vii ハンナ・アーレント「政治」と「虚偽」『思想』

viii 前掲「政治」と「虚偽」『思想』、p32

ix バートランド・ラッセル『バートランド・ラッセル著作集4 神秘主義と論理』p274